

第23回

品川区中学生の主張大会文集

品川区青少年対策地区委員会連合会





(発表者・司会者・前回大会最優秀賞受賞者・地区委員会連合会役員・審査員)

日時：令和5年 12月9日（土） 13時

場所：スクエア荏原 ひらつかホール

主催：品川区青少年対策地区委員会連合会

後援：品川区

協賛：品川区教育委員会

品川区立中学校長会

品川区立義務教育学校長会

品川区立中学校 PTA 連合会

〔 表 紙 荏原第六中学校 9年	う さ み はづき	さんの作品
	宇佐美 葉月	
〔 裏表紙 荏原第六中学校 9年	おかだ れいな	さんの作品
	岡田 玲奈	

はじめに

「品川区中学生の主張大会」は、中学生が日ごろ考えていることを多くの人の前で発表することにより、自立心や社会性を育てること、また、地域で青少年に関わる皆様が中学生への理解を深める機会とすることを目的に、平成十二年から開催しております。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、中止となった年もありましたが、皆様の協力を得ながら、今年で第二十三回大会を迎えることができました。また、四年ぶりの従来の規模での開催となりました。改めて、学校関係の皆様や各関係機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

本大会では、多様性や平和などSDGsに関すること、コミュニケーションに関すること、自分で決めた道を信じ前向きに生きることなど様々な発表がございました。中学生一人ひとりが地域や家庭、学校での日常生活を通して経験したことや感じたことなどを、自分の言葉で精一杯伝えてくれました。中学生の皆さんは、先生やご家族に支えられながら練習を重ねてこられたことと思います。是非この体験を大切にいただき、今後に活かしてほしいと願っております。

地域で活躍されている皆様におかれましても、この文

集を中学生の心の一端を知る手段としてご活用いただき、今後の青少年の健全育成のための参考としていただければありがたく存じます。

スマートフォンの所持が増えSNSの利用が広がる一方で、コロナ禍での制限を受けてきた子どもたち。抱えている悩みもますます多様化する中で、私たち地域の大人が果たすべき役割について考え行動し続けていかなければならないと感じております。

品川区青少年対策地区委員会では、関係機関の協力を得ながら、区内の各地域において、小・中学生が参加できる事業をはじめ、幅広い年代の方たちと交流できるよう、様々な活動を進めております。今後も青少年が健やかに成長できるよう学校、地域、家庭と更なる連携を深め、活動を推進してまいりますので、ご理解ご協力を宜しくお願いいたします。

最後に、この大会を開催するにあたりご協力いただきました審査員の方々、また、学校関係の方々に御礼を申し上げます。

品川区青少年対策地区委員会連合会会長

市川 信之助

目次

さまざまな活動を通して感じたこと、意見などをまとめたものとする。

最優秀賞

描き続ける

鈴木森中學校 九年

白倉帆乃佳

 $\vdots$
1

優秀賞

悩みの先に見えるもの

品川學園九年

國こく
分ぶ
槻けやき

$$\begin{matrix} \vdots \\ 3 \end{matrix}$$

優秀賞

真剣だからこそ、守れる命

豊葉の杜学園 九年

関^{せき}
珠^{しゆ}
璃^り

5

審査員特別賞

私の挑戦

戸越台中学校 八年

宮澤星怜

7

奨励賞

意識で生まれる差別

思いやりをもつこと

ジェンダー平等の未来を目指して

一人でいたっていいじゃないか

動物を守る責任

魔法の一言

幸せな生活

毎日を大切に

選択をしている人の数だけ

傍観者だった私にできること

子どもの未来を決めないで

講評

審査員長（元東邦音楽大学特任准教授）

池田ここみ	9
今野大誠	11
武藤美波	13
赤澤紗英	15
倉田妃菜子	17
青木さえ	19
羽生莉咲	21
志賀美幸	23
松山こもか	25
川口由芽	27
阿部ひまり	29
江森利公	31

最優秀賞

描き続ける



大井第一地区

鈴ヶ森中学校

九年

白倉 帆乃佳

みなさんは何か好きなことがありますか。私は絵を描くことが好きです。小さい頃からずっと絵を描いていました。「すごい」「かわいい」「上手」褒められるのが嬉しい。見てもらえるのが嬉しい。認められるのが嬉しい。その気持ちだけでここまで続けてきました。「自分は絵がうまいんだ。」なんて思ったこともありました。

でも、小学校の頃にインターネットが使えるようになって、いろんな人のいろんな絵を見られるようになって「あれ、自分、絵下手くそじゃないか?」と気づかされました。うまい人の絵は、その人の世界観があつて、線にメリハリがあつて、色の塗りがきれいで、キラキラ輝いて見えて。それと比べて自分の絵は、バランスが悪くて、線も汚い。それからは、今まで人に見せていた絵も、

見られないようにと隠してしまうことが増えました。もし、その時に他に好きなことがあったら私はそっちの道へ進んでいたかもしれません。でも、私には絵しかありませんでした。休み時間に外に出て遊ぶようなタイプでもなかったもので、同じように絵を描き続けました。教室で描いていれば、隠そうとしたって人に見られます。私が自分の絵は下手くそだ、と思っけていても、周りの人は変わらず褒めてくれました。しかし、「その言葉は本当なんだろうか。お世辞なんじゃないか。」と考えてしまい、前のように嬉しいと思えなくなりました。

そんな時に部屋を整理していると一枚の絵が出てきました。その時の自分よりもずっと下手くそで、何を描いているかも分からないような絵。でも、描いていて楽しいんだろ言うのが伝わってくる絵。「ああ、ちゃんと成長してるんだ。うまくなってるんだ。」過去の自分が絵を描くことを好きになって、途中でやめたりせず、ここまで描き続けてくれたから今の自分がいる。このまま描き続ければ、自分でも認めることができるような絵が描けるようになるかもしれない。そう思っけてがんばってきました。出かける時も、紙とペンはかささず持つて、何か少しでも待ち時間があれば、どんなところでも描いていました。

前にボソッと「生まれつき才能があつてうらやまし

い。」と言われたことがあります。これは、才能なんかじゃなく、苦しんで、挫折そうになりながらも、諦めず、好きで続けて、積み重ねてきた結果だと私は思っています。

中学生になって、イラスト部にはいり、優しい先輩に憧れて部長になって、かわいい後輩と仲良くなれて、私はもっと絵を描くことが好きになり、部活が生きがいでした。学校のキャラクターをデザインさせていただいたり、イラスト関係の仕事を先生に任せてもらえたりして嬉しかったです。でもまだまだ足りません。もっとうまくなりたい。将来は自分の絵を活かせるような、イラストレーターやマンガ家などの仕事がしたい。もっとたくさんの人に見てもらえて、認められるような絵を描きたい。

今、私は自分が選んだこの道に後悔はありません。これからの自分が、絵なんか好きにならなければよかったと思わないよう、私は絵を描き続けます。



優秀賞

悩みの先に見えるもの



品川第一地区

品川学園

九年

国分

槻

あなたはどんな高校に行きたいですか。九年生になると、よくそう問われました。部活熱心な学校。行事の充実した学校。進学校。きっと、人それぞれの志望理由があると思います。そして、よく耳にする、「高校受験はどんな大人になりたいかの一步目」という言葉。しかし、その時の僕は、どんな高校に行きたいかの質問に答えることはできませんでした。高校や、将来において、自分のやりたいことがわからない。それが僕の悩みでした。周りの友達には、はつきりと、もしくはぼんやりでも目標があり、そこに向かおうとしている。僕にはそれが無い。自分だけぼつんと取り残されるような感覚が怖く、ふとしたきっかけで思い出してしまう。そんな、自分自身が嫌いでした。

人はなぜ悩むのか。悩んでいた頃の自分にこのことを聞いても、きつと返事はないでしょう。その頃の僕は、自分を肯定することに必死でした。自分は大丈夫。悩んでない。こんなことで悩むのはうざい。そうやって、自分をとりつくり、悩むことを否定し続けました。それでも、もやもやは膨らみ続けつきました。膨れ上がったそれに押しつぶされそうになった僕は思い切つて、父に受験する学校や、将来について相談してみることになりました。しかし、父が返した答えは意外にも、「わからない。」思いもよらないその答えは、僕の望んでいたゴールへの明るい道標ではありませんでした。自分がわからないから大人に聞いたのに、これでは相談した意味がない。がっかりした僕に父はこう言いました。

「だってそれは、お父さんの受験や将来ではない。人に頼ることも大切だけれど、自分で悩んで出した答えは、大きな力になると思うよ。」

悩むことが力になる。今までの僕は悩むことを否定して避けてきました。でも、それでは変われない。つくろった自分のままでは、悩みはただの重りでしかない。父の言葉がそれらを気づかせてくれました。

「悩みによって初めて知恵は生まれる。悩みがないところに知恵は生まれない。」

これは、古代三大悲劇詩人、アイスキュロスの言葉で

す。悩みから逃げることに。それは、自分の中にある「新たな可能性」から逃げることに。父の言葉の本質に触れた気がしました。

人はなぜ悩むのか。それは自分自身が変わろうとしているからだと思えます。確かに悩むことは辛い。膨らんだ悩みをそう簡単に消すことはできない。それでも、悩み、迷い、選択していく。その経験が将来、僕らの背中を何度も押してくれる大きな力になる。今の僕はそう思います。

「そんなのきれいごとだ。」

そう思う人もきつといるのではないだろうか。実際、僕もそう思っていた人の一人です。思っていた、というより追い込まれた自分には、そんな前向きなことは考えられなかったという方が近いかもしれません。でも、もし今までの僕の主張が全て、「きれいごと」だったとしても、それはそれで良い気がします。少なからず、悩んでいるふがない自分を責めないであげられる。そして、その姿勢がいつか前向きな一歩を踏み出すためのきっかけになると思うからです。

どんな高校に行きたいのか。今の自分はその問いに、自信をもって答えることができます。新たな学校では上手くやっていけるのか、将来の自分はどうなっているのか。考えれば考えるほど悩みは生まれ、先の見えない迷

路のようになっていく。どれだけ頑張って歩いた道でも、そこは行き止まりで、何度、試しても、そこには出口はなくて。以前の僕はそんな自分自身を嫌い、つくろい、見えない壁にすくんだのでしょうか。でも今は、悩み続けながら前向きに進む自分を、信じています。



優秀賞

真剣だからこそ、守れる命



荏原第五地区

豊葉の杜学園

九年

関^{せき}

珠^{しゅ}

璃^り

「緊急地震速報です。強い揺れから身を守ってください。倒れやすい家具から離れ、テーブルの下に隠れてください。」テレビから流れる緊急地震速報。読売中高生新聞の記事によると、今後三十年の地震発生率は首都直下地震が七十パーセント、南海トラフ地震が七十から八十パーセントと言われています。最近も小さな地震が何度かあり、「もしかしたらもうすぐ大きな地震が起きるかも。」と不安になった人もいると思います。しかしながら、危険が迫っていることを理解しつつもあまり実感が持てず、自分ごととして捉えられていない人も多いのではないのでしょうか。私もそう感じていた時がありました。その考えが覆されたのは小学校の避難訓練の時でした。

その時、訓練中の私語が目立っていたことを理由に中休みを潰され、やり直しをさせられました。当時私は竹馬が大好きで毎日休み時間を心待ちにしていたため、「ちよつとおしゃべりしたくらいで先生厳しすぎる。別に本当に地震が起こった時はちゃんとやるんだからいいじゃないか。」と不満に思っていました。家に帰ってその愚痴をこぼしていると、当時NHKに勤めていた叔母が私にNHKの災害報道訓練について教えてくれました。

みなさん、NHKではその日の最終放送が終わった後、何をしていると思いますか。ほとんどの人が知らないと思いますが、NHKでは毎晩災害報道訓練を行っているそうです。災害報道訓練とは、番組放送中に地震などの災害が起きたことを想定した訓練のことで、実際に放送はしませんが本当に地震が起きた時と同様にアナウンサーがカメラに向かって報道します。地震が起こった時テレビをつけると、すぐに詳しい情報を得ることができますよね。それは、NHKの方々が毎日訓練を重ねているからこそできることなのです。叔母は私にこう言いました。

「みんなすごく真剣に訓練するから、おしゃべりをしてる人なんて一人もいないんだよ。私たちNHKは消防や自衛隊みたいに直接みんなを助けられるわけではない

けど、迅速な情報で一人でも多くの人を救いたい。真剣だからこそ、守れる命ってあると思うの。」

真剣だからこそ、守れる命。その言葉を聞いて、私ははっとしました。「竹馬に比べたら避難訓練なんてどうでもいい。」頭の片隅でそんなことを思っていた自分が、恥ずかしくなりました。先生やNHKの方は、私たちの命を真剣に守ろうとしてくれているのに、私はなんと愚かで、恩知らずだったのでしょうか。

真剣だからこそ、守れる命。NHKの方や、先生だけではありません。「もう誰も、失いたくない。」そう思っている人がたくさんいます。十二年前の三月十一日。あの日、たくさんの方が亡くなり、たくさんの方が一生消えない後悔を背負いました。喧嘩したまま学校に行き、それが母親との最後の会話だった人もいます。「最後だとわかっていたなら。」あの日の朝に、もう一度戻ることができたなら。」どれだけ多くの方がそう思ったことでしょうか。真剣だからこそ、守れる命。私たちはどうでしょうか。どうせ訓練だから、と手を抜いていませんか。防災バッグ、めんどくさいから今度でいいや、と思っていませんか。避難場所がわからないけど、まあなんとかなるでしょ、で終わらせていませんか。本当にそれで、自分の身を、大切な人を守る自信がありますか。地震はいつ起こるか分かりません。今日かもしれないし、明

日かもしれない。五年後かもしれないし、二十年後かもしれない。地震は止められません。それでも、被害を小さくすることは可能です。真剣だからこそ、守れる命。あなたに、もう一度地震と向き合ってほしい。これからずっと、生きていてほしいから。



審査員特別賞

私の挑戦

荏原第三地区

戸越台中学校

八年

宮澤星 怜



「成功は必ずしも約束されていないが、成長は必ず約束されている」

これは、私が強く胸を打たれた言葉です。この言葉のおかげで、私は大きな一歩を踏み出せました。

一般的に中学生について、「学生だから、まだ子ども」という考えもあれば、「小学生でもないんだから、もう大人の仲間入り」という考えもあります。私はよく、どちらなのだろう、と思ってしまいます。娯楽施設の入場料では、中学生は大人料金に入るところもあれば、子ども料金に入るところもあります。

そんな狭間にいる、私たち中学生。中学校生活は何をすればいいのだろうと、入学したばかりの頃、考えていました。子どものようににはちゃめちやに遊ぶわけにも行

かないし、大人のように仕事をすることもできない。でも私には、「勉強と部活、ただそれだけで中学校生活を終わらせたくない」という強い気持ちもありました。

中学校七年生の前半頃、「グローバル人材育成塾」という、授業とは別に英語を学ぶことができるレッスンを受けられる、という手紙が学校で配られ、私は英語が得意ではないけれど、友達に誘われて挑戦してみることになりました。行ってみると、そこには学年も性別も問わず、色々な人がいました。

最初は、どうすればいいのだろうと心配や不安に思ったり、こんなのやらなくてもよかったのではないかと思ったりすることもありました。しかし、周りの先輩たちは優しく、友達も増え、先生も面白くて、日に日にそのレッスンの時間が楽しくなっていきました。そして、自分から積極的に英語について調べることが増えていき、英語も前より好きになって、少しだけ自信を持てるようになりました。この経験から、苦手なことや、今はそんなに好きではないことでも、自分でいろんなことにチャレンジすることはとても大切だ、ということを感じました。それから、私は委員会やボランティア活動に参加したり、みんなの前で発表してみたり、部活で活躍できるように自主練習に行ったりなど、いろいろなことに思い切って、全力でチャレンジしています。

夏休みには、ほぼ毎日学校に行って、違う学年の生徒と一緒に理科の実験をしました。これは、学校で実験したことを夏休み明けに生徒みんなの前で発表をする機会があり、そのための準備でもありました。このようなことをしようと思えるのも、一回チャレンジしたこと、チャレンジする楽しさを知ることができたからだと思います。

今はまだコロナウイルスの影響で思うように色々なことはできないけれど、昔のような生活ができるようになったらもっと地域のボランティアや色んな人と関わってみたいです。また家族に貢献できるように積極的に家事をするなど、自分でできることからどんどん挑戦してみたいと思います。

「頑張った結果、失敗したってしょうがない。だって中学生なんだから。まだまだ経験が浅いのだから、今からたくさん学べばいい。」そう思えば、色んなことをやってみても何も怖くないと思うし、今の私はチャレンジすることはとても楽しいし、いいことだと思っています。チャレンジすることによって、きっと今までは見えなかった何かが見えてくると思います。それが大人になるための「大切な一歩」だと私は考えています。

これから中学校生活で、いや、高校生になっても、大人になっても、自分からできることにはどんどんチャレ

ンジしていったって、カッコいい大人になれるように一歩ずつ成長していきたいと思います。また、「約束されていない成功」をもつかみとりたいと思います。そしてそんな私の行動をみて、一人でも誰かに「チャレンジする素晴らしさ」を知ってもらいたいです。



奨励賞

意識で生まれる差別

荏原第一地区

荏原第一中学校

九年

池田 ことみ



今、世界では人種差別や男女差別など、様々な差別が問題視されている。世界中で対策がとられているが、最初に挙げた二つの差別では、意識した対策をとることで、余計な差別が生まれるのではないだろうか。

まず、疑問に思った人種差別の対策を挙げる。それは、アニメにおいて白人で描かれているキャラクターを実写化するときには黒人の俳優が演じる、というものだ。キャラクターの気持ちを表現するのには、人種は関係ないというメッセージ性が含まれていて、人種差別に反対する、全人類に平等な映画だと思える。しかし、そのような映画を二本、三本と便乗して出していけば、映画のもつ本来のメッセージよりも人種差別をしないというアピールの方が強くなってしまうと感じる。そもそも、そ

の役に演技があっているから黒人を俳優にするのと黒人だから俳優にするのでは、大きく違う。人種を意識してその人を見ている時点で差別が始まっているのではない。今回の映画はたまたま黒人の俳優であったが、このことはどの人種であっても言えることである。ある特定の人種を意識して対策をとることで、差別が生まれてしまうということが、世の中であまり理解されていないと感じる。

次に男女差別の対策を挙げる。世の中で女性のイメージが強い、メイクや家事についてのテレビ広告に男性の俳優が出演するというもの。そして、男性のイメージが強い会社の経営の宣伝で女性の俳優が出演するというもの。メイクや家事は女性がするもの、会社に行くのは男性の仕事だという固定観念を払拭するのにとっても有効な策だと感じる。実際に働く女性、家事をする男性が増え、男女で役割を決めるのではなく、人それぞれの得意不得意で役割を決められるような環境に近づいている。しかし、そうなることで新たに生まれる差別がある。働く女性が増えてきたことで、専業主婦をしている女性が後ろ指を指されたり、家事をする男性が増えたことで、仕事に熱心に取り組んでいる男性が、家族を大切にしないなどと批判されたりするというものである。過去の固定観念が壊されたことで新しい形が作られ、過去の

固定観念に当てはまっていた男女が否定されているのだ。女性は働いていないと怠けている。男性は家事をしていないと薄情である。このように、新しい固定観念によって、再び問題が起こっているのである。男女関係なく得意なことをできる環境にしようと対策したせいで、その環境に合った行動をしないといけなくなり、理想の男性像、女性像が生まれている。全員が自分の好きなことを何にもとらわれずやればいいのに、固定観念を消そうと意識したときに、自然と男女を意識し、男女差別が始まってしまうのだ。

私は、それぞれの考え方を持った人間がたくさんいるこの世界から、これらの差別がなくなることは難しいと思う。差別という問題が一度取り上げられてしまえば、それを意識してしまうようになり、全て同じものとして見ることは不可能になる。実際に私も、自分と違う人を自分と一緒に考えられたことはない。しかし、一緒ではなくても、それがその人の普通であるということをお互いに理解することができれば、意識があっても差別することがなくなるのではないか。意識によって生まれてしまう差別をそれを超える意識で上書きすることができれば、違いというものを感じなくなるのではないか。世界中の人々が、それぞれの当たり前で過ごせること、これこそが差別のない世界だと私は思う。そして、人によつ

てその当たり前は違い、誰かに合わせないといけない。ということとは全くない。だから「みんなと違うからダメだ。」とか「みんながこうしているからこれが全員の当たり前だ。」と思わないで欲しい。そして、周りに普通を決められることのない人生が増えてほしいと深く感じる。



奨励賞

思いやりをもつ人



品川第二地区

東海中学校

八年

今野大誠

みなさんは、友達とどのように関わっていますか。僕は、自分の意見を相手に押しつけないことを意識して友達と関わるようにしています。なぜならば、前に、僕自身が相手の意見を聞きもせず、自分の意見ばかりを押しつけてしまい、喧嘩になったり、その人を傷つけたりしてしまった経験があるからです。

学校で周りの人を見ると、悪ふざけかもしれないですが、友達に対して、少しやり過ぎなのではないかと思うような言動をしている人を時折見かけます。その人は、相手を面白おかしくいじって楽しんでいるだけかもしれないですが、それをされてる人の気持ちはどうでしょう。そして、そのような言動が段々エスカレートして、いじめに発展するのではないかと、僕は思っています。

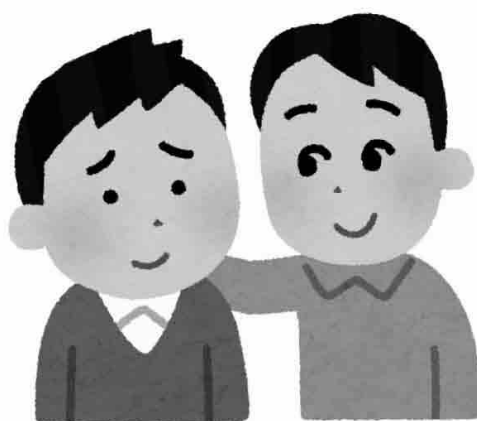
僕は以前、女子中学生がいじめを理由に命を落としてしまった、というニュースを目にしたことがあります。このニュースを見て、僕は加害者がこうなることをどうして想像できなかったのか、と強く疑問を持ちました。同時に、人の命までも奪ってしまういじめは絶対に無くなければいけないと思いました。そして、亡くなってしまった人の家族や、その人の友達の気持ちを想像しました。大切な人が亡くなってしまった悲しさや加害者への怒り、いじめに気付かず救うことができなかった悔しさなど、言葉で言い表せない程の気持ちで苦しんだことでしょう。それを思うと、僕は胸が張り裂けそうになりました。

このような悲劇が起きないようにするために、僕たちにできることは何でしょうか。僕は二つあると思います。一つ目は、日常生活から相手を思いやることです。相手の立場に立って気持ちを想像し、相手のために自分に何ができるのかを考え、行動すること。これが相手を思いやることです。相手への思いやりがあれば、心ない言動が少なくなり、多くの人が気持ちよく過ごせるのではないのでしょうか。そして、その思いやりを行動に表すことが大切だと思います。みなさんの周りに困っている人や悩んでいる人はいませんか。もし、そのような人がいたら、勇気をもって声をかけましょう。助けましょう。

このような、思いやりのある行動が広がれば、いじめを防ぐだけでなく、普段の生活も学校行事も、より良いものになると思います。

二つ目は、いじめが起きてしまった時に、周りの人が見て見ぬふりをせず行動を起こすことです。なぜなら、周りの人が行動を起こさないと、いじめは止まらず、被害者が追い詰められてしまうからです。もちろん、止めようとしたら、次は自分がいじめられるかもしれない、という不安もあるでしょう。けれど、勇気をもって一歩踏み出してみませんか。方法はいくらでもあります。近くの大人の助けを借りたり、その子と一緒に別の場所で過ごしてあげたりするなど、直接加害者に立ち向かう以外の方法で、被害者を助けることもできるはずです。

いじめは、被害者に深い心の傷を残すだけでなく、最悪の場合、大切な一人の命が失われることもあります。そして、被害者本人や周りの人の人生も、百八十度変えてしまいます。しかし、これらは自分も含め、すべての人が、先程話した二つのことを意識するだけで、防ぐことができるのではないかと僕は思います。だから、まずは自分の正義を信じて一歩踏み出してみよう。一人ひとりが勇気と思いやりをもって行動し、笑顔あふれる学校や社会にするために。



奨励賞

ジェンダー平等の未来を目指して



荏原第一地区

荏原第六中学校

九年

武藤 美波

中学三年生として迎えた夏。仲間と頑張ったバスケットボール部を引退し、高校受験に向けた勝負の夏として記憶に刻まれることになるのでしょうか。そして高校受験は、私に「ジェンダー平等」について考えるきっかけを与えてくれました。実は私の住む東京都の公立高校は全国四十七都道府県で唯一、男女別の定員を設けた入学試験を行っていました。そして私が進学を希望している都立高校は例年女子の方が高倍率、かつ合格点が高くなっています。「なぜ男子と女子で合格点が異なるのか？これは不平等なのではないか」と疑問に感じたことをきっかけとして、私は「ジェンダー平等」について調べてみることにしました。

ジェンダー平等の情報を探していると、今まさに全世

界の国々が取り組んでいるSDGsにたどり着きました。SDGsには「十七の持続可能な開発目標」が掲げられており、ジェンダー平等と並んで教育の平等も目標の一つとして含まれているのです。しかし残念なことに二〇二一年における日本の「ジェンダーギャップ指数」は百点満点中六十六点で、百五十六か国中百二十位と低い水準にとどまっています。これは先進国の中では最低評価であり「日本の低評価の原因は一体どこにあるのだろうか」と私は疑問を抱きました。実は日本のジェンダーギャップ指数を下げている最も大きな要因は政治分野にありました。なんと百点満点中わずか六点で百四十七位という目を疑うような低評価なのです。教育分野の評価は九十八点で九十二位であるのと比べても、その低さは突出しています。このように政治分野の点数が低くなっている最も大きな要因は、国会議員及び閣僚の女性比率の低さにあります。実際に二〇二〇年の衆議院の女性議員比率は、わずか九・九%と一割未満に留まっているのです。

このように女性の政治参画が極端に低く留まっている原因は、出産・子育て・家事負担といった面での男女格差にあるのではないかと私は推測しました。最近では徐々に改善が進んでいるようにも思えますが、まだまだ女性の負担が男性を大きく上回っている現実是否定できない

と感じています。「育児や家事は女性がやるもの」といった古くからの固定観念は、意外にも根強いものがありそうです。そして実は若い私たちの潜在意識にもこうした固定観念が無いとは言いきれません。固定観念と言うものは今すぐに変えられるものではないのかもしれませんが、変えて行きたいと強く願うことが大切だと思います。

いずれにしても日本の政治分野における男女差の大きさは、世界的に見ても胸を張れたものではないのは明らかです。日本のジェンダー平等を達成するためには、何はさておき政治分野での平等をしっかりと推し進める必要があると考えます。ジェンダー平等を阻害する最大の壁を取り除くことによって、教育や経済といった他の分野の問題にも良い影響を与えてくれるのではないのでしょうか。幸いなことに私の住む東京都では二〇一六年に初の女性知事が誕生しました。さらに地元品川区でも二〇二二年には初の女性区長が、二〇二三年には女性の教育長が就任しています。さらには冒頭で触れた都立高校の男女別定員撤廃が決定しましたが、これは二〇二二年に東京都で女性初の教育長が就任したことが大きいとの声もあるようです。

このように私の身近でも女性の政治参画への光が見え始めており、大変に勇気づけられる思いです。私は志望校合格を目指して受験勉強をしっかりと頑張りながらも

女性の政治参画に興味関心を持ち続けることも大切であると思いました。そして未来のジェンダー平等達成に向けて、少しでも力になれるように自分自身を磨いて行きたいと感じています。



奨励賞

一人でいたっていいじゃないか

荏原第四地区

荏原第五中学校

八年

赤澤 紗英



世間には「ひとりでいること」がかわいそうなこと」と思われる風潮があります。最近、「ひとり○○」という言葉聞きますが、その「ひとり○○」には、ひとりで行動することが普通ではないという前提があるように思います。実際、「ひとり○○」はハードルが高い、恥ずかしいという声も聞きます。

ですが、「ひとりカラオケ」も、「ひとり焼肉」も、特にかわいそうなことではないし、恥ずかしがることでもないと思います。

私自身、ひとりで過ごすことのほうが好きなのですが、あえて自分からひとりでいることを選んでいるのに、友だちがいないと決めつけられて馬鹿にされたり、「かわいそう」と、友だちから、声をかけられたりすることが

あります。

なぜ、そのように声を掛けてくるのかというと、やはり、世間では「ひとりでいること」が当たり前ではないこと、かわいそうなこと」という考え方があからずです。

しかし、誰かと一緒にいないと落ち着かない、誰かと一緒にいるほうが好きという人がいるのと同じように、ひとりでいるほうが過ごしやすい、ひとりでいるほうが、気が楽だという人もいます。「かわいそう」という認識をされてしまうと、ひとりで過ごしづらくなってしまいます。

「かわいそう」と声をかけてくる人たちには、ひとりでいる人が友だちと遊んだりおしゃべりをしたりする楽しさを知らないと思っているのかもしれませんが、ひとりぼっちで楽しくなさそう、と考えるのでしょうか。もし、そのような考えならば、そうではない人もいます。いうことを知ってほしいと思います。

私の場合は友だちと一緒にいたいこともあります、誰かと常に行動を共にするのは私のマイペースな性格に合わず、とても疲れてしまいます。だから、ひとりで時間大事にするようにしています。あくまでも、自分がひとりでいたいと思ってひとりを選んでいるし、ひとりでいることの楽しさもあるので、十分充実した生活を送れています。

私も友だちと一緒にいる楽しさや、おしゃべりをする楽しさはすぐわかりますし、友だちという存在自体を否定するつもりはありません。しかし、ひとりが好きだからひとりであるだけなのに、友だちがいないと決めつけられ、かわいそうな人だと思われるのは、違うと思います。そのために、肩身の狭い思いをしなくてはならないのは、どこか納得がいきません。

常に誰かと一緒にいたい人。友だちという時間もひとりでいる時間も大切にしたい人。他人に干渉されずに、自分だけの世界を楽しみたい人。中学校という小さな世界の中の「人とかかわり方」を切り取ると、様々なかわり方があることがわかります。ひとりひとりがお互いの価値観を尊重し合い、多くの人にとって過ごしやすい世の中になってほしいなと思います。

ひとりでいたっていいじゃないか。



奨励賞

動物を守る責任

大井第三地区

富士見台中学校

八年

倉田 妃菜子



皆さんは、今地球上で何種の生物が確認されているか知っていますか。現在地球上では約百七十五万種の生物が確認されています。とても多く感じますよね。ですが実は、千年に一種のペースで絶滅していたものが、ここ五十年間では一年に平均四万種が絶滅してしまったということもわかっています。さらに、これから生物が絶滅するスピードはだんだん速まっていくと言われているのです。絶滅危惧種がこれまでに以上に増え、絶滅のスピードも上がった原因には土地開発や密猟、地球温暖化の進行、ゴミの放置など人間の活動が深く関わっています。私はそれを知り、これ以上人間の都合で環境を壊し動物に悪影響を与えてはいけなと感じました。

しかし、「動物を保護することがすべて〈善〉」とは限

らないのではないか」という意見もあると思います。確かにそうとは限りません。なぜなら、犬猫などのペットに限って大切にしていたり、食肉を続けながら活動していたりと矛盾した行動をとっている人もいます。完璧な動物保護をしようとする、全ての動物をペットと同じように扱わなければいけないし、動物の肉を食べることもできなくなってしまう。つまり、全ての命を尊重するのはとても難しいことです。さらに新薬の開発では、猿や犬を危険な目に遭わせながらも動物実験を行ってきました。それにより、病気で苦しんでいる人たちが救われたという事実もあります。だから私は、全てを理想通りにはできないけれども、できる限りのことをすればよいと思います。人間と動物が共存することを目指し一人一人ができることをすれば、少しでも人間と動物のどちらをも守ることに繋ぐことができるからです。

私は、そんな動物保護や人間と動物の共存に関わる体験をしたことがあります。ある畑で野菜収穫の体験をしていた時に、畑の人が「野生の猪が夜、山から下りてきて畑の作物を奪ってしまう」という話をしていました。私はそれを聞き、畑の人が一生懸命作った作物をとっていつてしまうのはひどいと思ったし、もし猪が山から下りてくるほど飢えていたのだとしたら可哀想だとも思

ました。そこで、それを防ぐためにどうしたら良いか、自分なりに考えてみました。もし私だったら、猪の餌の一つである生ゴミをある特定の場所に置き、商売用の作物がある畑には電気の通る柵を立てます。そうすれば、猪が餌を食べる場所も、電気の通る柵の中も安全になるのではないかと思ったからです。生ゴミも削減できて、エコになると考えました。しかし、この案には柵を立てる際に多くの費用が必要となってしまうという課題があります。インターネットによると、他にも、管理が大変になるなどの理由から柵を立てることを諦めてしまうケースが多いそうです。ですから、その時の状況によって適切な選択をしていかなければなりません。そのためには、どちらの立場にもなって考えて、どちらも納得するような答えを導き出すことが必要なのだと、経験を通して感じました。

では、動物と人間が共存するために具体的にどのようなことをすれば良いのでしょうか。世界には「ラムサール条約」や「ワシントン条約」、「二国間渡り鳥保護条約・協定」など動物を守るための条約があります。日本では動物愛護センターを建てるだけでなく、レジ袋を有料化したり農薬使用を控えたりするなど地球を守ることで動物を保護する活動も行っています。その中で私は、ゴミ拾いを自主的に行ったり植物を育てたりしています。ま

たSDGsと結びつけて、地球の動物について考えることもできると思います。そのような取り組みをするために重要なのは様々な視点から物事を考え、実行することです。私はこれらのことから、動物の絶滅をできる限り防ぎ、人間と動物は共存していくべきだと考えます。



奨励賞

魔法の一言

大崎第一地区

日野学園

九年

青^{あお}木^きさえ



「たった一言が人の心を温める。たった一言が人の心を傷つける。」ネットを見ていたらこんな言葉が私の目に飛び込んできました。私たちは様々な言葉を使って、日常、人とのコミュニケーションを図っています。

言葉の大切さを、母が話していました。以前、母が飲食店でアルバイトをしていたとき、初めてレジに入り、慣れないながらもお会計を済ませて「ありがとうございます」とお客さまに言ったとき、お客さまからも「ごちそうさま、おいしかったよ!」という一言が返ってきました。そうです。ごく当たり前の普通の言葉に思えますが、そう言われた母は、自分が調理したわけでもないのに、本当に嬉しい気持ちがいっぱい上がってきたそうです。たった一言ですが、お店に対する満足感や、お客様の思いやり

が伝わってくる一言です。母はその経験を通じ、改めて一言の大切さを感じた、と話していました。私も飲食店を出るときに、自然と「ごちそうさまでした。」と言うのですが、それは両親が昔から必ずそう言っていたからだと思います。昔、母がかけてもらって嬉しかった何気ない一言が、こんな風に広がって別の人の心をほっこりと温めているのです。

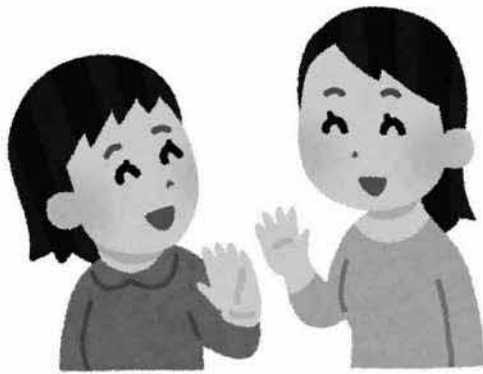
また、言葉は人の持つ力を伸ばす能力も備えています。私はバドミントン部に所属していましたが、大会に出場したとき私の実力よりはるかに上の選手と対戦することになりました。正直にいうと私は部活内でも上手な方ではありません。「勝てるわけがない」という諦めの気持ちでいっぱいのまま試合に臨みました。しかし私の試合が始まった瞬間から、部活のみんなの応援が聞こえてきました。真剣な気持ちのこもった「がんばれ!」の一言は、先程まで諦めに包まれていた私の心に光をみせてくれました。こんなに真剣に応援してくれているのに適当にやり過ぎなんて、部活のみんなだけでなく相手にも失礼だし、何よりそんな自分が情けない。すぐに気持ちを切り替え「最低でも五点はとる」という目標を定め、それをクリアすることができました。私と対戦した選手はその大会で準優勝した強豪選手で、試合自体はやはり負けてしまったものの、私の中では目標を達成でき、やりきっ

たという手ごたえを得られた、悔いのない、さすがしい試合ができました。このように真剣な思いのこもった一言で人は前に進めるのです。「おはよう」「ありがとう」「ごめんね」「がんばれ」「こんにちは」どれもわずかな言葉ですが、この一言を言うか言わないかでその場の空気が変わったり、言われた人の心を明るく照らしたりします。そしてその嬉しさをまた別の誰かに伝えようとすると……その繰り返しがこの世の中を温かく住みよいものに変えていくように思います。

一方で言葉は、たった一言で人の心を傷つける力も持ち合わせています。インターネットを使つての誹謗中傷のニュースがここ何年かで問題になっています。有名人が誰だかわからない不特定多数の人の書き込みを見て、それが原因で自殺するという悲しい事件もありました。何かの動画を見た後、コメント欄をのぞいてみると、共感したり褒めたりするコメントがある一方で、批判、さらにはどうみても人格攻撃に等しいと思われるようなコメントもあります。それを読んでいるうちに「これは相手を非難することが目的ではなく、書いた人自身のストレス発散なのだ」と私は感じました。一人でも多くの人が自分の書いた言葉の残酷さに気づき、反省し、繰り返し、繰り返さないことを心がければ、それによって傷つく人は減らせます。そして人の心を照らし、前へと進める温かい一

言を発していけば、そこには悲しみよりも喜びの多い世界が待っているはずですよ。

まるで魔法のように相手に幸せや喜びを与えたり、「凶器」となったりする言葉。私はこれからもその使い方に注意し、誰もが幸せになる言葉を使って生きていきたいです。



奨励賞

幸せな生活



八潮地区

八潮学園

八年

羽生莉咲
はにゅうりさき

皆さんは、自分の生活が当たり前か、ということを考えてことがありますか。私はご飯を食べることができること、ある程度の自由があること、学校に行くことができたり、家族がいたりすることは当たり前だと、自然に思っていました。しかし、テレビで見たロシアとウクライナの戦争の特集が私の考え方を大きく変えました。

ご存じの通り、二〇二三年二月二十四日から今日まで、ロシアとウクライナの戦争は続いています。泣きながら親を一人で探すとても小さな子供や、狭い防空壕の中で大人数で生活する人々、破壊されてしまった街など、平和な生活をしている私たちからしたら、考えられないくらいとても心が痛む映像ばかりでした。私はこの映像を見て、とても悲しくなったり、怒りを覚えたりするのと

同時に、自分がどれだけ幸せに生活できているのか考え、その幸せな生活に対し、感謝しなければならぬと考えるようになりました。

私は、日々の生活の中で、やりたくないと思ってしまうことがよくあります。例えば、学校の授業や部活などがあって疲れてしまった時、家ではもう勉強はしたくないと思ってしまう。しかし、先ほどの戦争の映像と照らし合わせて考えてみました。きっと、人々や街並みの様子から、ロシアやウクライナの人々には集中して勉強ができる安全な環境があるとは絶対に言えないと思います。このような現状を知ると、「勉強はやりたくない」といった発言や気持ちは、とても贅沢で、そのようなことはあまり言えないはずだと思います。

さらに、私はウクライナのある七歳の女の子のインタビュー映像を見て、今のこの生活にさらに感謝しなければいけないと感じました。その女の子のインタビューの一部では、お母さんとは無事に逃げることでよかったけれど、お父さんが国のために兵の仕事へ行ってしまったとありました。また、お父さんは現在も戦地で働いていて、定期的に会えるけれど、完全な安全を確認できないそうです。だから、お父さんのことが毎日とても心配で、なかなか会えないのもとても悲しいと言っていました。また、戦争のせいでもとても仲良くしていた友達と離れて

しまい、早く一緒に遊びたいと涙ながらに話していました。

私には弟がいます。私は弟が生意気だからといって、どうしても喧嘩をしてしまう時があります。お互いにからかい合ってしまったことで喧嘩につながるなど、とてもくだらない原因ばかりです。しかし、この女の子のインタビューを聞いて、大好きな家族や友達などの大切な人と当たり前のように一緒にいることができない人もいることを実感し、喧嘩などをしていられないと思うようになりました。

このようにして、私たちの考えている当たり前は、ある特定の人にとっては贅沢な場合もあるということに気づきました。私の生活の中には、当たり前ではないことがたくさん含まれているのです。

ご飯を食べることができると、学校に行くことができること、家族がいることなど、皆さんは本当に当たり前のことだと思いませんか。私は、小さなことでも自分の都合でわがままを言わないで、贅沢をあまりしないうようにしたいと思います。

当たり前ではない生活を当たり前だと感じることで、きている私たちは、とても幸せだと思います。今、幸せに生活できているということに、日々感謝していきたいです。幸せな生活を続けることは、平和へとつながります。

す。私はこの平和のために、これからも友達や家族を大切にしていきたいです。



奨励賞

毎日を大切に



荏原第三地区

荏原平塚学園

九年

志^し賀^が美^み幸^{ゆき}

私は最近、生活をしている中で「前に戻りたいな。」と思うことがあります。前までは、何とも思わずに普通に毎日を過ごしていました。しかし、普通に過ごしていた私の生活を変える、ある出来事が起こりました。今回は、私の生活を変えた、ある出来事を二つ紹介します。

一つ目は、中学校生活が残り少ないということです。今年を受験生で受験勉強もしないといけない中、運動会や修学旅行などいろいろな行事が終わってしまい、残りの行事は合唱コンクールだけです。合唱コンクールが終わったら、完全に受験勉強に集中しないといけないので、「受験までのカウントダウンがもう始まっているんだな。」と実感します。自分でも、中学一、二年生るときよりも定期考査への向き合い方が変わったり、成績を以

前より気にするようになったりと受験に向けて勉強への態度が変わってきていると思います。しかし、受験に近づくにつれて、友達と遊ぶ時間が無くなったり、もう運動会や修学旅行がなかったりするのを考えると、「去年に戻りたいな。」と思うことが増えてきて少し悲しいです。特に、私たちが中学一年生の頃は、まだコロナウイルスが流行っていて、運動会が中止になったりなど、あまり充実した学校生活を送ることができませんでした。しかし、中学二年生のときはコロナが少し収まり運動会や磐梯移動教室を無事に行うことができました。今年も今のところすべての行事ができていたので嬉しいです。友達ともあと五ヶ月ほどで離れてしまうので、みんなとたくさんさんの思い出を作って卒業できるように残りの学校生活も全力で楽しみたいです。

二つ目は、お父さんが病気になってしまったことです。お父さんが病気になってしまったことを伝えられたのは、私が中学一年生のときでした。お母さんに教えてもらったときは正直、「すぐ治るから大丈夫。」だと思っていました。しかし、お父さんが病気になってから約二年が経った今でもまだ病気は治っていません。約二年の間に何度か入院をしたり、治療法を変えたりしているのにもかかわらず、まだ病気は完全に治っていないので、「すぐ治るから大丈夫。」という気持ちから、「早く治っ

てほしい。」という気持ちに変わりました。私が小さい頃、お父さんは単身赴任で北海道に行っていたので、あんまりお父さんに会えませんでした。しかし、月に一回は家に帰ってきて、たくさん遊んだり、いろんな場所に連れて行ってくれたりしました。そのとき、お父さんはずっと笑顔で、私に一度も怒ったことがなく優しい人でした。しかし、病気になるてからは薬の副反応で最近はあるまり笑っているところを見なくなり、みんなが笑っているときに、一人笑っていない姿を見ると、「前に戻りたいな。」というも思っています。そして、「毎日を大切にしないといけないな。」と思いました。そのきっかけは、お母さんの一言でした。その一言とは、「これ以上悪くならないように、薬を飲んだり治療をしたりしているんだよ。」と言われたことです。これは、私がお母さんにお父さんの病気が治るかを聞いたときの答えでした。このとき私は、「完全に治ることは難しく、いつ体調が悪化するかわからない。」と思いました。この出来事をきっかけに私は、後悔が残らないように一日一日を大切にしようと思いました。

このような理由から、私は毎日、一日一日を大切にしながら過ごしていきたいです。



奨励賞

選択をしている人の数だけ



大井第二地区

伊藤学園

八年

松^{まつ}山^{やま}こもか

皆さんは、自分が一日の内にどれだけの選択をしているか、知っていますか。また、考えたことはありませんか。昼食は何にするのか、何を着ていくのか、どこへ行くのか、などと人間は一日の内に、あまり意識していない中でも、たくさんの選択をして生きています。このような選択は、人間の平均選択数として、三万五千個に上るそうです。

私は、この三万五千という膨大な数を聞いたとき、あまり想像が出来ませんでした。単純計算になってしまいますが、二十四時間で単位変換したら、八万六千四百秒になります。その内に三万五千個の選択をしているとしたら、二秒に一度選択をしていることになります。

例えば、学校や仕事中に眠くなってしまうたといいます。

しかし、そのとき、眠いと感じても実際に寝ることはしませんよね。このような、眠ろうと思えば出来ることでも、時と場合に応じた対応を考えながら過ごしているとすると、三万五千という数にも納得することが出来ます。ですが、ここで疑問が生まれます。

私たちは考えるときに必ず脳を使いますよね。これは誰しもがそうだと思います。先ほどの例のように、人は時と場合に応じて判断し、情報を整理し、決断をしています。これは、とても脳への負担が大きいと考えられます。この過程の中で、生まれてくるのが「決断疲れ」です。有名な心理学者であるジョナサン・レバー氏とシャイ・ダンジガー氏が行った調査では、決断疲れになってしまうと衝動的な決断が増えたり、決断の先送りが増えたりしてしまうと分かりました。

この、一つ目の衝動的な決断は誰にでもあるのではないのでしょうか。ついついお店などで可愛いと思った物を買ってしまったら、買うべき物は全て選り終わっているのに、美味しそうな物を追加してしまったり。

私は、二つ目の、決断を先送りにしてしまう方に重心を置きました。私は、この問題は今だからこそ、大きく取り上げる必要があるのではないかと考えました。

現代社会において、戦争がロシアとウクライナで起きていたり、北朝鮮からミサイルが飛ばされていたり、あ

らゆる争いが起きていることは皆さんも知っていると思います。争いだけではありません。今では活動が盛んになっている環境問題もです。地球温暖化、ゴミの増加、海面の上昇、永久凍土が溶けてしまっていること、挙げればきりがありません。

私は、この時代に問題になっていることは、今までにしてきた「選択」が大きく関わっているのではないかと感じます。

争いといえば、戦争と連想する人が多いかもしれませんが。それだけではありません。小さな犯罪から大きな犯罪までもが、争いの類なのではないでしょうか。現に日本では、世界に比べて犯罪件数も少なく、年々件数も減ってきています。しかし、日本以外の各国に目を向けると、増加している国があるということも事実です。

環境問題では、今では発電に気を配ったり、ゴミの分別を行ったり、さまざまな取り組みが行われていますが、それも、つい最近始まったばかりのことです。

これからの社会を支えていくのは、今の私たちであり、これからの私たちです。このような問題で今までの自分の選んできた選択は正しいものだったと言えますか。気が抜けていたところはありませんでしたか。選択をする際に頭の使い方、自分なりのルールを決めておくことで、決断疲れになることも防げ、正しい選択ができるのでは

ないでしょうか。

私は、自分の代からでも、一人一人の自分なりのルールや考え方、選択の仕方での現代社会での問題は解決できると思っています。これから選んでいく選択の重要性を自分で見極めることは、これから生きていく上で意識すべきことのひとつなのではないでしょうか。



奨励賞

傍観者だった私にできること

大井第一地区

浜川中学校

九年

川^{かわ}口^{ぐち}由^ゆ芽^め

浜中

私はSDGsの十七の目標のなかで、私たちに一番身近だと感じた「平和と公正をすべての人に」という目標に注目しました。いじめの問題が関係していると思ったからです。今までSDGsという言葉聞いたことはあっても、私たちには関係ないだろうと他人事のように聞き流し、誰かがやってくれるだろうと思っていました。しかし、そんな自分の考えが変わるきっかけになったのが、目の前でいじめが起こったとき、見て見ぬふりをしましたことでした。

いじめは加害者と被害者だけの問題ではありません。テレビなどで「次のターゲットが自分になるのが怖くて、いじめを止められなかった」という場面を見ることがあります。

私はそんな場面を見るたびに、そんなことはないだろうとか、誰かが早く止めればいいのにと思っていました。しかし、実際その状況に置かれたとき、本当に怖くて何もできないのだなと思いました。そんな私のように「自分には関係ない」「関わりたくない」と思っている人のことを「傍観者」と言います。

「大人になっても忘れられない。ずっと心の奥に小骨が刺さったような気持ちで過ごしている。」これはあるいじめの傍観者の言葉です。傍観者は自分を守ろうとして見て見ぬふりをします。しかし、結局自分の心も傷ついています。一人でいじめを止めようとするのは難しいことです。仲間と「良くないよね」という空気を作ったり、被害者に声をかけて心の支えになってあげることができれば、その子が声をあげるきっかけになるかもしれません。直接止めること以外にも、方法はたくさんあります。まずは自分にできることは何か考え、やってみることが大切です。

この世の中に「いじめられてもいい人」はいません。自分が周りの人と違うから、相手が怖いから……。どんな理由があっても、嫌なことは嫌と言わなければいけません。また、「誰かをいじめていい人」もいません。いじめを止めることの出来そうな侮辱罪や暴行罪といった法律もありますが、私は人が声をあげることでしかいじめ

は止められないと思います。そして「傍観者」はいじめに加担することも、止めることもできる存在だと思います。だからこそ、傍観者たちはいじめの問題に正面から向き合う必要があるのです。

私は自分の経験を通して、「傍観者」の存在を少しでも多くの人に知ってほしいと思っていました。また、「加害者」「被害者」「傍観者」に関わらず、一人ひとりが自分にできることを考えて行動すること、それが「誰ひとり取り残さない持続可能な世界」を実現する大きな一歩になると思います。



奨励賞

子どもの未来を決めないで

大崎第二地区

大崎中学校

八年

阿部 ひまり



皆さんが思う素敵な大人とはどのような人ですか？思
いやりのある人や、賢い人など、様々な意見があると思
います。また、あなたは将来どのような大人になりたい
ですか？そして、あなたは人に、堂々と、どのような大
人になりたいかを伝えることができますか？この三つの
質問を少し考えながら、私の思う素敵な大人について聞
いてほしいと思います。

まず、私は一つ目の「素敵な大人とはどのような人か」
という問いの答えをもうすでに出しています。私は問い
の後に、二つ例を出しました。この時点で、私の思う大
人が、私の中で、すでにできあがっていることがわかり
ます。私が考える「大人」は、思いやりがある人や賢い
人というイメージです。どうして私がこの二つをイメー

ジしてしまうのか。それは、私自身がたくさんの大人か
ら、今まで言われてきた言葉だからです。それが、大人
のイメージとつながったのではないかと思います。

私には二歳違いの姉がいます。姉は勉強ができて、努
力家です。その姉に比べ、私は、勉強が苦手で、中々物
事が続きません。姉と私は昔から性格もやることも正反
対だったのです。私は、幼い頃から、姉と一緒に、親に
通知表を見せるのが嫌でした。自分が勉強ができないこ
とに気づかされるからです。

勉強が得意な姉は、私立の中学校へと進学しました。
私はそんな姉がうらやましいのと同時に、尊敬もして
いました。姉は多くの大人から、「立派な大人になれる」
とか「将来が楽しみ」とか言われていました。その頃、
幼かった私には、姉がとても大きく見えていました。で
すから、大人のイメージが姉と重なり、「賢い人」になっ
ていったのだと思います。

そんな姉に憧れていた私が今、頑張っていることがあ
ります。それは、ソフトテニスです。中学校に入学して、
ソフトテニス部に入った私は、ソフトテニスに夢中にな
り、先輩に憧れ、一生懸命練習しました。今、私の手元
には、私のペアの相手や部活の仲間達とたくさん練習し
て勝ち取ったメダルや賞状があります。私は、やっと姉
には手に入れられなかったものを手に入れることができ

ました。一生懸命姉の後を追いかけてきた私ですが、大きくなって、人それぞれの得意、不得意は変わらなくても、成長して手に入れることができるものは、人それぞれなのだと感じています。姉は勉強、私はソフトテニス、それぞれ頑張ってきたことは違っても、そこから得られたものは確実にあります。これから先、高校生、大学生と、見た目も中身も、どんどん大人へと近づいていきます。その度に経験を重ね、様々な景色を見ていくことで、大人へ近づいていくのだと改めて感じました。

周りにいる大人の言葉は、子どもにとって時に、「予言」のようで怖くなることがあります。

現在、アメリカ大リーグで大活躍している大谷翔平選手は、彼が「二刀流を目指す」と口にした時から、多くの人から「二刀流は無理ではないか」と言われ続けてきたそうです。しかし、自分の夢や目標をかなえるために、周りの言葉に左右されず、自身の考えを貫き、今の道に進みました。もし、彼が周りの言葉に振り回されていたら、現在の彼はいなかったかもしれません。

私も、彼と同じように、私自身の考えや主張をしつかりと持ちながら生きていきたいと思っています。周りの言葉をうのみにせず、自分の考えを持ちながら、物事に取り組める、そんな人になりたいと思います。

「○○ができれば立派な大人になれる」などという、

作られたイメージにとらわれず、自分らしさのある人達がこの先、増えるといいなと思っています。そして、どのような大人になりたいかを選んだとしても、受け入れてくれるような、平等な世の中になるといいなと思います。



講評

審査員長 江森 利公

(元東邦音楽大学特任准教授)

はじめに、全体を通して審査員としての印象ですが、日常的な内容を詳しく見つめて分析的に述べるといったものが多く見られました。また、自分自身の心のありようをていねいに見つめ、思いを重ねていくといったご発表も多く見られました。紛争や地球ふつとような世界的な話題になっていくことがまずあって、そのことに発表の中身を合わせていくようなものではなかったこと、このことは、何か特別なことがなければ「中学生の主張」にならないというわけではないということを証明してくれました。その意味でも、今年も大変レベルの高い発表になったと思います。

【個人】

1. 荏原第一中学校 池田 ここみさん

差別を無くそうとしてみた対策が、また新しい差別を生んでしまうのではないか、という考えから、どう解決したらよいかという課題をもつて追及していき

ます。「ひとりひとりが違って当たり前なのだ」ということが普通になって初めて、差別のない世界に近づく、ということを主張しました。はっきりとした口調で、全体を見回しながら堂々と発表されてよかったと思います。着眼点が新鮮で、説得力がありました。

2. 東海中学校 今野 大誠さん

いじめを理由に命を縮めてしまった中学生のニュースを見て、大誠さんは、いじめは絶対になくさなければならぬと思います。いじめをなくすために、基本的な内容を踏まえたうえで、自分の言葉で、今できること・普段からできることを提案します。まず、相手の気持ちを思いやること、自分の正義を信じ、勇気をもって一歩踏み出すこと、という提案は、多くの人の共感を得られたのではないかと思います。今の太誠さんの等身大の考えを表しているご発表でした。思いのこもった言葉で、力強く語ってくれたことが印象に残りました。

3. 品川学園 國分 楓さん

楓さんは、お父さんの「自分で悩んで出した答えは、大きな力になると思うよ」という言葉で、迷い悩んでいたことが吹っ切れ、新しい自分へ進むことができました。

した。今ある自分を肯定して生きていくことが大事なのだと気づいたからです。誰にでも多少の悩みはあるものです。聴いている多くの方々にも参考になったことと思います。「悩むことが力になる」という言葉は、勇気の出る、タイムリーな一言になったのではないのでしょうか。間の取り方、項目立てが工夫されていて、大変聴きやすいご発表でした。

4. 豊葉の杜学園 関 琉璃さん

「どうせ訓練だから…」と気を抜いて避難訓練をしていた自分の考えを改め、いつ起きてもおかしくない災害に備える、という決意を述べています。放送局に勤める叔母さんの「真剣だからこそ守れる命がある」という言葉にハッとしましたからでした。十二年前の大震災の例や叔母さんの具体的な話など、引用された例は、琉璃さんが考えを改めていく過程で、大変効果的であったと思います。表情豊かに、情景が目には浮かぶように話してくれました。

5. 荏原第六中学校 武藤 美波さん

高校進学をきっかけにして、ジェンダー平等についての情報を集め、調べ、理解するとともに、考えを深めていきます。特に、日本の現状について数字を挙げ

ながら追及していくところは、説得力がありました。また、ジェンダー平等に興味関心を持続けることや、特に女性の政治参画が大事だと、これからの努力点にもふれて、力強く主張してくれたことが心に残りしました。

6. 荏原第五中学校 赤澤 紗英さん

具体例をいくつも挙げながら、一人でいるのにはそれぞれの思いや考えがあるのだから、互いにそれを尊重して生きていきたい、それができる世の中にしたい、という主張でした。一人でいるのはかわいそうだと決めつけないでほしい、見た目だけで判断しないでほしいというのは、物事の本質を見極めることの大切さにも触れたものだと思えました。発想が印象的なご発表でした。

7. 富士見台中学校 倉田 妃菜子さん

動物の絶滅をできる限り防ぎ、柔軟な考えをもって、動物と共存していくべきだ、と主張します。結論から始めたところが良かったと思います。動物たちと人間の関わりについて、自分の体験にも触れながら、多面的に考えを深めていったところも良いところです。今年、各地で熊の出現が相次ぎ、話題になっていたこ

とも頭に浮かびました。結論に至るまでの思考過程に、妃菜子さんの誠実な人柄がよく表れたご発表でした。

8. 日野学園 青木 さえさん

「たった一言が、人の心を温める。たった一言が、人の心を傷つける。」ネットで見つけたこの言葉から、さえさんは自分自身と言葉との関わりを見つめなおします。そして、だれもが幸せになる言葉を使って生きていきたいと強く決意します。特に、お母様とのエピソードが印象的でした。相手を大事に思う言葉が、相手に幸せや喜びを与える魔法の言葉になる、ということがよく伝わってきました。普段何気なく使っている言葉に目を向けて、言葉の持つ力について、自分の体験と結びつけながら、深く考えていったところが、良い点です。

9. 八潮学園 羽生 莉咲さん

テレビで見た戦争の特集から、自分の今の生活は決してあたりまえではないと気づいて、そこから自分の考えを展開していきました。事前に作文を読ませていただいていたので、楽しみにしていたご発表の一つでした。家族や友達を大切に、感謝を忘れないようにして生きていきたいと結論づけています。

10. 鈴ヶ森中学校 白倉 帆乃佳さん

好きなことを続けていくとき、時には自信を無くすことがあったり、成長が自覚できたりすることがあります。絵を描くことが大好きな帆乃佳さんが、自分と向き合いながら、絵と共に成長していく姿がよく伝わってくる発表でした。自分で自分の成長の証をひとつひとつ見定めていくところが素晴らしいと思いました。柔軟な発想で、自分の個性や能力を生かせるよう、進路選択をして欲しいと願っています。自分自身の体験を効果的に使って、構成もしっかりとした主張でした。

11. 荏原平塚学園 志賀 美幸さん

毎日を平凡に過ごしていた美幸さんの生活を大きく変えた、二つの出来事を中心に、心の変化とともに述べていきます。一つは、中学校生活が残り少なくなってきたこと、もう一つは、お父様が病気になることとでした。この二つを丁寧に見直すことで、美幸さんは、「昔に戻りたい」という内向きな考えを改め、「今の一日を大切に生きていこう」と強く決心します。これから前向きに生きるであろう美幸さんの成長が、楽しみにするご発表でした。

12. 戸越台中学校 宮澤 星怜さん

星怜さんは、グローバル人材育成塾に思い切って挑戦したことで、今まで見えなかった新しい世界が見え始め、「一歩踏み出してよかった」と心から思うことができました。挑戦する楽しさにも気づくことが出来ました。また、新しい自分になっていくことの素晴らしさを、他の人にも知ってもらいたいと願うようになりました。自分の体験に基づいた主張には、力強さがあります。かつこいい大人になることを期待しています。

13. 伊藤学園 松山 こもかさん

こもかさんはいま世界で起きている争いごと、環境問題も、みな「選択」が大きくかわっていることに気づきます。決断は、選択の上に成り立っているのだから、未来を担う私たちは、この選択の重要性にもっと目を向け、確固とした考えをもって「選択」する必要がある、という主張でした。選択の仕方が変わってしまう、自分たちの未来を真剣に考えていることが伝わってきて、とても頼もしく思いました。聞き手に問いかけたり、同意を求めたりするところは、相手を十分に意識していることをうかがわせるご発表になりました。

14. 浜川中学校 川口 由芽さん

いじめの構造については頭の中で十分理解していても、実際にいじめを目の前にして何もできなかったことから、いじめをどう解決したらよいのかを自分で一生懸命考えていったところが、心に残りました。「いじめの傍観者は、いじめに加担することも止めることもできる存在だ。まずは、自分にできることは何なのかを真剣に考え、やってみることだ。」と強く思います。「まずやってみることが大切だ。」というその考えに大賛成です。改めて、いじめ問題について考えさせられる印象的なご発表でした。

15. 大崎中学校 阿部 ひまりさん

会場全体を見回しながら、笑顔で、話し始めたのがとても印象的でした。聞き手に投げかけるように、「どんな大人になりたいですか」と問うところから始めます。周囲によっていつの間にかつくり上げられた素敵な大人ではなく、自分自身でしっかりと考えた大人を目指そう、という主張でした。自分の未来は自分で決めていくのだ、という強い意志が感じられ頼もしく思いました。自分の良さに気づいていく過程では、ひまりさんの成長がはっきり伝わってきました。

【全体】

物事をよく見て、自分の考えをしっかりと作って、聴衆の皆様をしっかりと見つめながら主張した十四人のご発表から、素敵な中学生像を感じました。どの発表もよく考えられていて、説得力を持って伝わってくるものでありました。

あえて二つ工夫点を挙げておきたいと思います。

一つは、話し方の工夫です。話し言葉は一回で消えていきますので、誤解のないように、迷いのないように、自分の言葉を相手に伝えていくことが大切です。そのためには、間の取り方は重要になってきます。例えば、「刑事は血だらけになって逃げる強盗を追いかけた」という言葉を用意しました。この時、血だらけになっているのは刑事でしょうか、強盗でしょうか。「刑事は、血だらけになって逃げる強盗を追いかけた」と間をとると、血だらけになっているのは強盗ということになります。しかし、「刑事は血だらけになって、逃げる強盗を追いかけた」となると、血だらけになっているのは刑事になります。このように、どこで一区切りの間をとるかを意識して工夫していただきたいと思います。

もう一つは、話の構成です。甘いあんこの中に塩を入れると甘さが引き立つように、自分の論に対して反対の立場の考え方を入れたり、別の考え方を差し込むと、自

分の考えがもっと引き立ちはつきりすることがあります。構成を工夫すると、もっと良くなると感じました。せっかくの主張を自分の中だけで完結させない工夫の一つにもなるはずです。

今日発表してくれた中学生の皆様が、自分の体験をもとに、自分の言葉でしっかりと発表する姿に感動しました。生徒の皆様には敬意を表し、私の講評を終わりたいと思います。また、この大会を支えて下さった多くの皆様方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



○前回までの三賞受賞者

●平成12年度（第一回）平成12年12月2日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	支え合って、生きるために	荏原第二中学校	2 年	塚田 まなみ
優 秀 賞	私たちができること	富士見台中学校	3 年	浅井 裕子
//	学校・親・地域と生徒	鈴ヶ森中学校	3 年	岩崎 良輔

●平成13年度（第二回）平成13年12月1日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	地域のために、私のために	荏原第六中学校	3 年	峰 知子
優 秀 賞	地域のなかで生きる	日野中学校	2 年	小川 航
//	地域ボランティアを経験して学んだこと	東海中学校	2 年	播摩 瞳
審査員特別賞	地域と私のかかわり	富士見台中学校	3 年	大竹 菜津美

●平成14年度（第三回）平成14年12月7日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	地域の人々とのつながり	浜川中学校	3 年	柳澤 志保
優 秀 賞	レッツ！ボランティア	荏原第一中学校	3 年	高橋 南美
//	ボランティアを通じて	富士見台中学校	3 年	和田 瑠美子
審査員特別賞	僕の「故郷」ー八潮	八潮南中学校	3 年	坪田 光司

●平成15年度（第四回）平成15年12月6日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	さあ、みんなでボランティアを	荏原第六中学校	3 年	梁川 美枝
優 秀 賞	生徒会として地域にできること	平塚中学校	3 年	森口 諒
//	僕らにできること	八潮中学校	3 年	高野 真之
審査員特別賞	ボランティアと私	富士見台中学校	3 年	大竹 美里

●平成16年度（第五回）平成16年12月4日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	あいさつをしよう	荏原第六中学校	3 年	堀尾 りえ
優 秀 賞	ボランティアに挑戦	荏原第五中学校	2 年	中野 美憂
//	地域とのつながり	鈴ヶ森中学校	3 年	渡辺 奈津子
//	「五反田の夏」	日野中学校	9(3)年	内山 洋輔
審査員特別賞	地域の皆さんの励ましで	東海中学校	3 年	杉本 育美
//	二期の生徒会活動を通じて	富士見台中学校	3 年	太田 英子

●平成17年度（第六回）平成17年12月3日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	いじめ	荏原第四中学校	3 年	横部 美穂
優 秀 賞	笑顔で地域づくり	八潮中学校	3 年	小林 理沙
//	現代社会に必要なものーあなたはもっていますかー	荏原第二中学校	2 年	曲師 夕貴
//	ジュニアリーダー教室で学んだこと	伊藤中学校	9(3)年	伊藤 泉
審査員特別賞	日本に来て感じたこと学んだこと	日野中学校	9(3)年	ジェスレイRコンフェルド
//	ボランティア活動で成長しよう	荏原第五中学校	3 年	広瀬 可奈

●平成18年度（第七回）平成18年12月2日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	教育を受ける権利をもつ私たち	戸越台中学校	9 年	豊田 紘子
優 秀 賞	Cooperation	城南中学校	9 年	斎藤 琴音
//	今、私たちに出来る事	大崎中学校	8 年	木村 ゆう
//	Let's Think About The Earth	平塚中学校	9 年	鷹見 彩
審査員特別賞	命	伊藤中学校	9 年	尾形 大生
//	班長を経験して	荏原第六中学校	8 年	小林 旺世

●平成19年度（第八回）平成19年12月1日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	私の母校	平塚中学校	9 年	木山 友貴
優 秀 賞	嘘	日野学園	9 年	中島 深代佳
//	思いやり	荏原第六中学校	8 年	溝口 斐狩
//	今の私たちにできること	戸越台中学校	9 年	川田 知佳
審査員特別賞	一生一組から	八潮南中学校	9 年	仲妻 みゆき
//	地球温暖化と私	八潮中学校	8 年	秋山 豊人

●平成20年度（第九回）平成20年12月6日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	「命の輝き」	東海中学校	8 年	篠原 優海
優 秀 賞	人生最大の体験	荏原第四中学校	9 年	池田 隼人
//	自分対自分	戸越台中学校	9 年	青菅 美咲
審査員特別賞	私の学校	荏原平塚中学校	8 年	肥沼 佑依

●平成21年度（第十回）平成21年12月5日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	ユニセフリーダー講座に行って	富士見台中学校	9 年	林 晃玟
優 秀 賞	じいちゃんの笑顔	城南中学校	9 年	白石 陽香
//	将来の夢	浜川中学校	8 年	相樂 滯
審査員特別賞	道しるべ	荏原第三中学校	9 年	大瀧 夢乃

●平成22年度（第11回）平成22年12月4日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	つながりの大切さ	荏原第一中学校	9 年	松尾 江里香
優 秀 賞	いのちのバトンをつなぐ	伊藤学園	9 年	山森 明子
//	いじめをなくす一歩	鈴ヶ森中学校	9 年	木村 賢幸
審査員特別賞	越えたい背中	城南中学校	9 年	畠山 翔

●平成23年度（第12回）平成23年12月3日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	震災の募金を通して気付いた本当のボランティア	荏原第六中学校	9 年	川崎 誠士
優 秀 賞	差別の気持ち、ありませんか	富士見台中学校	7 年	川村 さくら
審査員特別賞	あきらめない心	浜川中学校	9 年	河出 奈都美

●平成24年度（第13回）平成24年12月8日・荏原文化センター

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	言葉の暴力	東海中学校	8 年	岡本 華穂
優 秀 賞	出会いは人を変える	富士見台中学校	9 年	菅谷 日南子
//	今を生きる私たち	鈴ヶ森中学校	9 年	鈴木 康平
審査員特別賞	日本国憲法の権利と責任について	荏原第五中学校	9 年	博田 そら

●平成25年度（第14回）平成25年12月14日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	あの日から	品川学園	8 年	渡来 由麻
優 秀 賞	自分らしい自分になるために	鈴ヶ森中学校	9 年	小栗 沙樹
//	平和を考えた夏	東海中学校	8 年	中岡 悠空
審査員特別賞	言葉で伝える	荏原第六中学校	9 年	米澤 友梨子

●平成26年度（第15回）平成26年12月13日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最 優 秀 賞	故郷	東海中学校	8 年	金崎 優樹
優 秀 賞	世界のマナーとわたし	豊葉の杜学園	9 年	松村 美結
//	教育のありがたみ	富士見台中学校	9 年	細木 優佳
審査員特別賞	言葉	日野学園	9 年	大輪 ひよか

●平成27年度（第16回）平成27年12月12日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	今私たちができること	鈴ヶ森中学校	9年	藏 慧子
優秀賞	声	品川学園	9年	岩田 ゆう奈
//	中学生から見た社会	伊藤学園	9年	竹内 翔吾
審査員特別賞	自分に自信を持つこと	日野学園	9年	島 優香里

●平成28年度（第17回）平成28年12月10日・きゅりあん

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	共に生きる社会を目指して	大崎中学校	8年	種部 夏実
優秀賞	携帯電話の使用について	伊藤学園	9年	保野 百合子
//	未来を弾く	品川学園	9年	上村 正利
審査員特別賞	孤独死から変える未来	鈴ヶ森中学校	9年	野村 光里

●平成29年度（第18回）平成29年12月9日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	見えない心の傷	荏原第一中学校	9年	高地 七星
優秀賞	話せなくても	品川学園	9年	矢田堀 成実
//	思い込みの重さ	大崎中学校	8年	加茂 詩音
審査員特別賞	自分も相手も傷つけないために	鈴ヶ森中学校	9年	古屋 心織

●平成30年度（第19回）平成30年12月8日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	ひとりじゃない	荏原第六中学校	9年	緒方 紫麻
優秀賞	『一九八四年』から考える私達の自由	品川学園	9年	石川 睦月
//	男女平等	豊葉の杜学園	9年	飯寄 瑚子
審査員特別賞	気持ちを人に伝えるには	伊藤学園	9年	富永 夏々子

●令和元年度（第20回）令和元年12月14日・立正大学 品川キャンパス 石橋湛山記念講堂

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	少しの勇気で助け合い	荏原第五中学校	8年	川端 あかり
優秀賞	乗り越えてはいないけど	戸越台中学校	8年	岸村 帆葉
//	「個性」とは	日野学園	9年	石川 真由香
審査員特別賞	頂上を目指して	荏原第六中学校	9年	栃谷 好香

●令和3年度（第21回）令和3年12月11日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	争うこと	荏原第六中学校	9年	高瀬 結空
優秀賞	自分から	荏原平塚学園	9年	鈴木 絢音
//	生きてるだけで社会貢献	八潮学園	8年	丹 つぐみ
審査員特別賞	緊張しても大丈夫	富士見台中学校	9年	袖山 鈴菜

●令和4年度（第22回）令和4年12月10日・スクエア荏原

賞	発表題名	学 校	学 年	氏 名
最優秀賞	助ける	荏原第六中学校	9年	今井 莉央
優秀賞	理解	荏原第一中学校	9年	松浦 夢彩
審査員特別賞	一言多く	八潮学園	8年	白石 結菜

○第23回中学生の主張大会司会者

鈴ヶ森中学校	8年	玉川	みりあ
鈴ヶ森中学校	8年	北村	空雅
豊葉の杜学園	8年	河村	菜緒
豊葉の杜学園	8年	吉田	悠那

○第23回中学生の主張大会審査員

(審査員長) 元東邦音楽大学特任准教授	江森 利公
品川区立中学校PTA連合会代表	松舘 俊英
品川区教育委員会事務局教育総合支援センター指導主事	戸上 琢也
品川区青少年対策地区委員会連合会代表	根岸 輝行
品川区青少年対策地区委員会連合会代表	近野 チカ子

品川区民憲章

制定 昭和五十七年十月一日
(一九八二年)

品川区は、東に東京湾を擁し、西にはるか富士を望み、国際都市東京の表玄関に位して、江戸の昔から交易の拠点となり、我が国文化と産業の発祥地として、あまねく都民の心のふるさとであります。

わたくしたちは、この輝かしい歴史と伝統を誇りとし、文化の香り豊かな近代都市への発展を目指して、ここに区民憲章を制定いたします。

- 一、わたくしたちは、自由と平等を基本理念として、
住民自治を確立し、進んで区政に参加します。
- 一、わたくしたちは、心の触れ合いを大切にして、
互いに人権を尊重し、人間性豊かな環境をつくります。
- 一、わたくしたちは、古きよき歴史と伝統を守り、
さらに生活文化を発展させ、これを後世に伝えます。
- 一、わたくしたちは、自然を大切にして、生活との調和をはかり、
健康で豊かな区民生活を目指します。
- 一、わたくしたちは、自立と連帯の精神に支えられた、
思いやりと生きがいのある地域社会をつくります。

憲章制定の経過と形態

「品川区民憲章」は、昭和五十六年十二月三日発足した品川区民憲章制定委員会（会長 沖邑品吉氏 委員数二十名）が区長の諮問を受け、延べ十二回の会議を持ち、昭和五十七年五月十七日、「品川区民憲章案」として答申されました。区では、答申の内容を慎重検討の結果、内容的にも、作成過程なども適切であると判断し、答申通り区の憲章とすることに決定しました。

また区では、名実ともに区民の総意による憲章とするため、昭和五十七年第二回東京都品川区議会定例会に付議し、去る七月六日、「品川区民憲章」として議決されました。

憲章は、前文と五項目の本文からなり、前文では、歴史と伝統に輝く、品川区の位置と誇りを示し、文化の香り豊かな近代都市への発展を目指す決意をうたっており、本文の五項目は、制定の目的を達成するための区民の心構えが具体的に述べられています。



司会者（鈴ヶ森中学校）



司会者（豊葉の杜学園）



発表



発表



発表



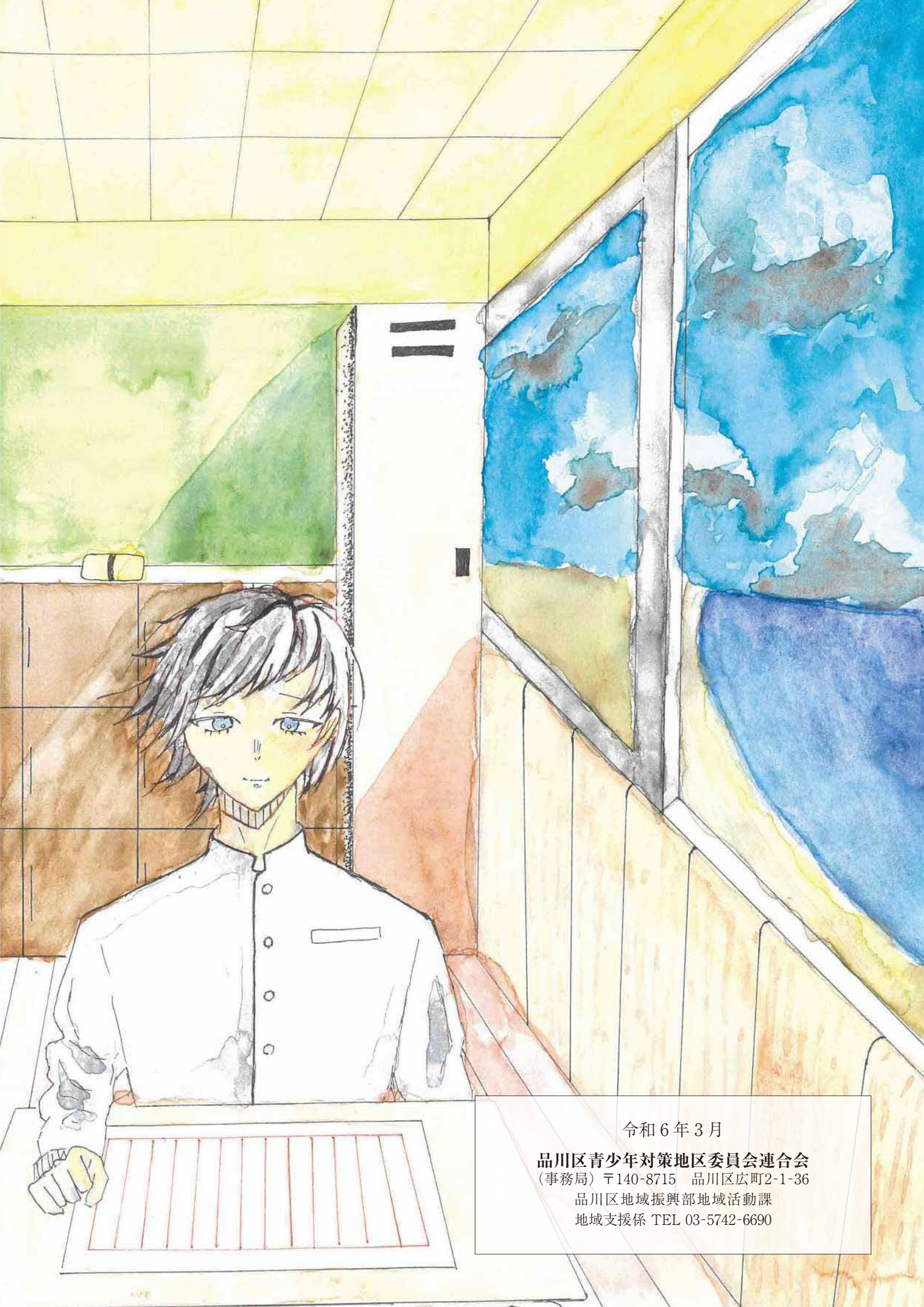
発表



審査員長講評



表彰状授与



令和 6 年 3 月

品川区青少年対策地区委員会連合会
(事務局) 〒140-8715 品川区広町2-1-36
品川区地域振興部地域活動課
地域支援係 TEL 03-5742-6690